

設立 平成24年 5月15日
開塾 平成24年 9月 8日
発行 平成30年 6月 9日
(68号)



[事務局] 〒648-0094
橋本市三石台4-1-15
TEL 0736-38-3669
FAX 0736-38-3680
発行 學塾・中之島事務局

人間学講座
第68講

「中江藤樹の『鑑草』に学ぶ」

中江 彰先生



■ 藤樹先生の生涯

中江藤樹先生は江戸幕府が開かれて五年後に近江の片田舎（小川村）の農家に生まれました。

九歳のときに侍だった祖父に引き取られ、教育を受け、元服（十五歳）の歳に藩士となります。しかし二五のときに帰省した際、その時点で父も祖父も他界して一人となっていた母親のことが気がかりだったのでしよう、その後辞職嘆願書を出しましたが、受理されず、やむなく脱藩します。

脱藩は死罪ですから、その覚悟をもって故郷に戻られたのでした。藩からは咎めを受けることないといわれたその後は、四一歳の十数年間を母親の側で暮らし、侍の門人には儒学、陽明学を教え、また一方では村人には人としての道を教えるという後半生を送られました。この年この世を去られており、当時でも短命だった。しかしこの片田舎で過ごされた十数年が中江藤樹という名前を後世に残すこととなったのです。

■ 修己治人

藤樹先生は儒学の祖と言われており、儒学者です。儒学は江戸時代は孔孟の学（孔子と孟子の教え）と呼ばれていました。その教えは「修己治人」の言葉にあります。意味は「己を修めて人を治む」。徳をもって己を磨き修めて、人を治める。大切なことは、人の上に立ち治める人は、なによりも自分自身の徳を修めよ、という教えです。今の政治行政に携わる方々は人を治めることばかりをなさっていますが、己の心を磨かずにくまなくは

ない、よい政治が行なえることはないでしょう。陽明学は心学ともいわれ、勉強を積んだだけでは役にたたないとし、心を磨くことを重要としました。

先生は三十一歳のとき『原人』を書かれますが、これは「人間とはなんぞや」という問いの答えともなる論文です。その答えを見つめるために学ばれたものが、四書五経の「五経」です。

その学びは「大いなる上帝がある」とする考えです。上帝とは「神明」の意味で、目に見えない不可思議な力（＝神）が、万物を生み出した。また、気というガス状のものが大宇宙にあり、軽重に別れ、重いものは大地となり、軽いものは天になった。そうして天地が形作られた。そしてこの天地の間に万物が生まれ、その中の最高のものが人間である。そもそも我々人間は大いなる上帝から生み出されており、その上帝という神明は、常に人間の行いを見ている。上帝の中に在る神明は人間一人ひとりの中にあり、それは「明德」と呼ばれる心であるとした。だから人間は、上帝の命を受けて、この世に人間として誕生しているのであり、明德をもって生きよ、と藤樹先生は説かれています。全ての人間はみな等しく同じ明德の心を持ってあるべき仕事・使命を果たしていくものということです。

■ 孝行の篤志

『鑑草』の序文に「心に生死なし」とあります。「肉身には生死ありといへども、心には生死なきによつて、今生の心すなはち後生の心なり」。我々の肉体は生まれてからやがて老化し、寿命を迎えます。しかし心には生死はなく、さらに、今持っている心が後生の心になるという意味です。心に



生死がないということは、今生においてやったことが後生に報いることになるということです。

『鑑草』巻之四「それ人の死期は、生をうくる初にさだまりて、天地神命もみだりに返事給ふ事あたはず。まして人力をや」。人の寿命は生まれてくる始めに定まっております、その使命を変えることはできない、とあります。藤樹先生は運命論者ではなく、過去にひどい生き方をしても今生において素晴らしい行いをすればその運命は変わっていくと伝えておられます。そのためにも上帝から与えられた心、明德を生きることが重要なのです。人間の持つ良くない心に「慢心」があります。この自分中心の心、また相手を見下す心を取り除くには、どうすればよいのか？

その答は「温恭自虚」。「温恭」とは、穏やかで慎み深い心、「自虚」とは、自らが心をカラ（虚）にするという意味です。このような心がけによつて、謙虚な心がその人の中に形成されていくと、やがて慢心は取り去られていく。そうして天地の心に一步一步と近づいていくでしょう。

天地の心とは「孝」の心です。「孝」の漢字が示すものは、上が「老人」、下が「子」を表しています。この字は子どもが父母を背負っている姿なのです。この孝の心が発揮できれば、慈愛の心、穏やかな慎み深い心となつてゆき、過去にどのようなことがあろうと、それによる運命すら転換していける。「孝行の篤志なるは、明德明らかなる故なり。明德明らかなる時は、宿悪の天刑さえ免れぬれば、まして雷、山をくだけども有徳の人をばそこなうこと能わざること、言わずしてさとのべし」。誠意、真心を尽くせば、天刑さえも免れることとなるう、と藤樹先生は説いておられるのです。

（抄録 中川千都子）

《グループ討議》

□ 講師 中江 彰先生

「中江藤樹の『鑑草』に学ぶ」

【Aグループ】

- ① 修己治人
- ② 天地の心
- ③ 温恭自虚

【Bグループ】

- ① 天地の心
- ② 慈愛と恭順
- ③ 孝

【Cグループ】

- ① 修己治人
- ② 過去世(生)
- ③ 天地の心すべてを受け容れる

【Dグループ】

- ① 恭順の心
- ② 慈愛の心
- ③ 修己治人
- ④ 過去世(生)

【Eグループ】

- ① 修己治人
- ② 孝
- ③ 温恭自虚
- ④ 天地の心



第6期 人間学塾中之島塾質向上委員会
～番外読書会～「森信三先生に学ぶ」～第7回～
平成30年5月12日(土) 12:30～12:50

1. 挨拶
2. ミニ読書会
○「一日一語」 各月 12日
3. 閉会(時間厳守)

森 信三先生 「一日一語」 「各月12日」の言葉

- 1月12日
悟ったと思う瞬間、即迷いに陥す。
自分はつねに迷い通しの身と知る時、そのまま悟りに与かるなり。
- 2月12日
物事は一おう八〇点級の出来映えでよいから、絶対に期限に遅れないこと。
これ世に赴する一大要訣と知るべし。
- 3月12日
ハガキを最上の武器として活用しうる人間に――
かくしてハガキ活用の達人たるべし。
- 4月12日
同僚より五分前に出勤する心がまえ――
それが十年も積み重ねられたとき、いつしか大きなひらきとなる。
- 5月12日
朝起きてから夜寝るまで、自分の仕事と人々への奉仕が無上のたのしみで、
それ以外別に娯楽の必要を感じない――というのが、
われわれ日本人のまともな庶民の生き方ではあるまいか。

《課外カリキュラム》
・ 森信三先生の教えに学ぶ《ミニ読書会》

- 6月12日
金銭は自分の欲望のためには、出来るだけ使わぬように――。
そしてたとえわずかでもよいから、人のために捧げること。
そこにこの世の真の幸福度が開けてくる。
- 7月12日
肉体的な距離が近か過ぎると、真の偉大さは分りにくい。
それ故その人の真の偉大さがわかるには、
ある程度の距離と期間を置いて接するがよい
- 8月12日
女が身につけるべき四つの大事なこと
(一) 子供のしつけ。
(二) 家計のしまり。
(三) 料理。そして
(四) 最後が清掃と整頓
- 9月12日
自分より遙かに下位の者にも、敬意を失わざるにいたって、
初めて人間も一人前となる。
- 10月12日
夫婦のうち人間としてエライほうが、
相手をコトバによって直そうとしないで、
相手の不完全さをそのまま黙って背負ってゆく。
夫婦関係というものは、結局どちらかが、
こうした心の態度を確立する外ないようですね。
- 11月12日
この世では、総じてキレイごとで金をもうけることはむづかしい。
これ現実界における庶民的真理の一つといてよい。
- 12月12日
人は内に嚙みたるものがあるてこそ、はじめてよく「清貧」を貫きうるのであって、
この認識こそが根本である。



『新契縁録』完成しました



ご寄稿刊行に、ご協力くださいましたみなさま方に衷心よりお礼申しあげます。

平成三十年六月一日(金)午前、出版社より六一七冊が弊社に搬入され、待機していました清水様ご夫妻、広瀬様、竹内様、丸山の五人で発送作業をし、夕方五時郵便局に引き渡すことができました。ご寄稿頂きました。三一五名の皆様、誠にありがとうございます。

翌日の六月二日(土)清水様ご夫婦と丸山の三人で岡山の寺田先生のご新居に完成した『新契縁録』をお届けしました。瀬戸内海に面し、すぐ近くに瀬戸大橋が見える五階建て

の立派なホテルが保養所の様な素晴らしい所でお過ごしでした。お嬢様の宮本しん子様も先に着かれていて寺田先生共にお出迎えいただきました。大変お元気な様子で『新契縁録』を手に大変お喜びいただきました。



会報誌『若竹』6月号より一部転載

『新契縁録』より転載させていただきました。

「寺田一清先生に導かれて」

鍵山秀三郎

平成四年、寺田一清先生にご縁をいただいた私は、人生の新しい道を拓くことができました。その道は明るく広い世界に繋がっている道でした。

それまでの私の人様との交流は、仕事と掃除に関わる方々だけの、狭い範囲に限られたものでしかありませんでした。

寺田先生は、小さな世界に閉ざされて生きてきた私に、次々と新しい世界を与えてくださいました。それはいずれも新鮮で、私にとりましては眼を瞠るようなことばかりでした。

森信三先生を師と仰がれる立派な方々にも、ご縁をつなげてくださいました。私一人でコツコツと続けてきた掃除の活動を、教育の場に結びつけてくださったのも寺田一清先生のお陰でございます。

このように新しい道を拓き、新しい世界に導かれたのは私一人ではなく、多くの方々が、恩恵を蒙っておられることは、皆様がよくご存じの通りでございます。永年にわたって森信三先生の高邁な思想を、誰にも分かりやすく広められました。

実践人の家に、教育界以外の方々が教えを求めて集まられるようになりましたのは、ひとえに寺田一清先生のご功績によるものと存じます。

これから、ますますお元気で今まで通り一人でも多くの人を、啓蒙なされますことをお祈り申しあげます。

「念々感謝」

横田南嶺

寺田一清先生とおご縁は、なんとといっても先生のご労作『森信三先生一日一語』に始まります。まだ致知出版社から発行される前の、寺田先生が編集発行される布製の本を、知人からいただいて、いつも座右の書にしていました。

立腰の教えや人間の真価をはかる目安など、修行僧にもよく引用して話をさせてもらっていました。森先生はもとより、その御高弟の寺田先生は、私にとって遠くから仰ぎ見る存在でした。

それが不思議なご縁に恵まれて、平成二五年に月刊誌『致知』二月号で対談させていただくことができました。その対談の前に、寺田先生はあらかじめ鎌倉までお越しくださり、坐禅をなされました。頭の下がる思いでありました。それから、寺田先生が主宰されている「人間学塾・中之島」に、私は出講させていただくことになりました。

平成二七年には、寺田先生に円覚寺までお越しただいて『修身教授録』の輪読会のご指導も賜りました。忘れがたい思い出です。これは今も寺で継続しています。人間学塾・中之島にも五回出講させていただいています。昨年よりは寺田先生のお姿を拝することは難しくなってきましたが、先生とのご縁が深い皆様と勉強できることは、命年の楽しみとなっています。

会の始まりには、寺田先生の作詞された歌を皆で合唱します。リズムの良い曲で、私も普段堆口ずさむようになりました。

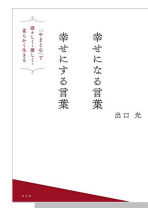
その三番の歌詞には「天仰ぎ地にひれ伏して願わくば師恩の光、しみじみと念々感謝……」という一節があります。

私はいつも、この「念々感謝」の言葉を自らの胸に刻むように心がけています。寺田一清先生との「一瞬早すぎず、一瞬遅すぎない」出会に「念々感謝」しています。

《お薦め書籍》

『幸せになる言葉 幸せにする言葉』

出口 光 著



出版 水王舎
頒価 一五二円(税込み)
ISBN 13:978-4-8047-0080-2

やまとことばには「すべてのものに『命』が宿る」、「すべてはつながって共生している」という二つの要素があります。私たちは古来より大いなる存在を受けいれ、それが「やまとことば」のなかで表現されているのです。慌ただしい生活のなかで、自分や周りの人が本当の「幸せ」を感じるためにはどうしたら良いか？忙しい…余裕がない…イライラしてしまう…。そんなあなたに贈りたい内面から美しくなる方法を説いた一冊。

《先哲に学ぶ生き方》

森信三 先生

「長の心得」

人に長たる者としては単に自分一人が誠実というだけでなく、多くの人々を容れるだけの度量の広さとともに、さらに、一旦事が起こった場合には身をもって部下をかばうだけの一片の俠気ともいえるべきものがなくてはならぬ。

森信三

「運命を創る一〇〇の金言」より

《人間学塾・中之島》

基本カリキュラム

*日時 7月14日(第二土曜)

*場所 大阪大学中之島センター

10F 佐治敬三ホール

*講師 浅野仁美 先生

避難所が教えてくれたこと

宮城県在住、東日本大震災では、はからずも避難所のリーダーとして、避難者、学校、地域を考えながら避難所運営にあたった。〇〇生活とキャラ弁作りが大好きな主婦であり、たまに毒を吐く？妻であり、世界一娘を愛する母。現在、避難所で出会った人々との縁で、各地で震災の体験を伝えている。震災により家は全壊、したが、現在は自宅を新築しに居住。

■卒塾文集「なかのしま」寄稿案内

愈々第六期学びの「非日常空間」も7月のカリキュラムを残すのみとなり、一年間のまとめの時期となりました。「天分塾」より続けてきました卒塾文集も二〇号となります。みなさま方が一年を通しての学びや気づきを想起して原稿に書き連ねてください。

◆原稿締切 7月10日【厳守】

◆発行 8月9日(卒塾の日)



(詳細は案内確認ください)

【塾生講話】

皆様よりご自身の生い立ちや経験など、いろいろ語って頂きました。

◆池永辰朗塾生

「未来のために」



◆中村美智留塾生

いま導かれて……」



◆西村俊幸世話人

「わたしの学んできたもの」



※ 次回は、あなたもお話してください!!